

## ジュラ語

原口武彦（元新潟国際情報大学教授）

私のはじめてコートジボワールの地を踏んだのは1967年のことであるから、私とコートジボワールとの付き合いもかれこれ40年余りになる。現地にも3回にわたって都合4年半長期滞在し、調査研究に携わってきた。しかし今振り返ってみて努力したかいがあったと感じることができるのはジュラ語の学習ぐらいかもしれない。大別しても5系統になるコートジボワールの60余もある部族語の中から私はジュラ語を選んで学ぶことにした。ジュラ語はもともと植民地化前から遠隔地貿易に従事してきたジュラと呼ばれる商人層の言語である。コートジボワールの経済発展に伴って、公用語のフランス語がままならぬ庶民の間に部族の枠を超えて、特に国家の保護を受けることもなくジュラ語はいわば自生的に普及してきた。今日、コートジボワール国民の6割ぐらいがジュラ語を多少なりとも理解することができるという。同じ系列の言語は西アフリカ内陸部に広く存在し、それらを合わせると西アフリカ内陸部中心に800万に近い話者人口をもつと推計されている。

1980年代の第2回目の現地滞在時から私は本格的にジュラ語を学習し始めた。当時はフランス人の研究者が作成した500語余りの単語を収録した語彙集しか存在しなかった。私は個人的に師事したジュラ語の先生に監修してもらい私の学習ノートをもとに1000語余りの基礎単語を収録した『*Lexique du Dioula*』（ジュラ語語彙集）を1993年にコートジボワール国立大学付属応用言語研究所から刊行することができた。といっても私のジュラ語の会話能力は流暢というにはほど遠い。それでも現地調査の途次パリで西アフリカ出身と思われるタクシーの運転手さんに出くわすと「イ・ボラ・ミン？」（どこの出身ですか）と話しかけることができるくらいにはなった。2年前、パリの日本大使館に立ち寄った際、守衛さんにも話しかけてみたら通じた。2人は異郷で出会った同胞のように意気投合し、お互いの家族のことなど語り合った。公用語のフランス語ではこうはいかない。小さな言語は暖かい。

「クマ・マン・ディ・ダ・ケレン・ナ」（話というのは1つの口からでは良くない）は、話し合いの大切さを諭すジュラ語の諺である。日本の大学の講義で私の「アフリカ論」はいつもこの諺で締めくくりにしてきた。バオバブの大樹の木陰で車座になって語り合う人びとの姿が目につかんでくる。